シェルハーク教授とその思い出

招へい実行委員会

このたび日本気象学会で，ベルリン自由大学のシェルハーク教授を招へいするに際しては，その実行委員会を設け一切の準備にあたった．同教授は3月13日より22日までの10日間日本に滞在したが，その間，有益な講演を行うと共に，気象学会員や研究グループと話し合いや討論を行なうなど大きな足跡を残され，学会としても招へいの目的を十分達したものと思われる．

シェルハーク教授の訪日を記念し，実行委員会の各氏が分担して教授にまつわるいろいろの話を次にまとめ，気象にその生涯を捧げている偉大な教授の風貌の一端を会員の皆さんにお伝えすることにした．

ベルリンにおける Sherhag 先生*

大　井　　正　一**

私は5年前に北岡先生の紹介で一年間先生の御指導にあづかった.（菊地正武君，田宮兵衛君もその後指導を受けている.）先生の来日に当り当時を振返って見ると，いろいろ面白いこと，参考になることが多い．ここには特に幾つかのエピソードを通して先生のユニークな教育や研究環境等の背景を紹介してみたい．先生は日本流に云えば気象研究所長，大学教授，主任研究官，主任予報官を一人でやっている様なものだから極めて忙がしい訳だが，その事自体が先生の理想だとも云える．

先生は Tempelhof 飛行場の真正面にあるアパートの二階に住んでいるが，その質素なことは，所員が湖畔等に立派な家を持ち，Volkswagen で通っているのとは大分違う．本棚には戦前からの市電，市バスの毎月の系統図や時刻表が揃えられていて，先生の蒐集癖が窺われる．毎朝6時15分に家を出て30分もバスに乗り，15分も歩いて研究所に着く．毎朝空模様を見るという点で是が一番良い方法だと云われる．空から落ちて来る椽の実の毬から，又冬の厳しい寒さから頭を保護するために帽子を被るのだというが，道で脱帽して挨拶されるとこちらが面喰ってしまう．そこには古風というより，何か古い伝統のようなものが感じられる．所長室の先生の背中の本棚には何千冊と本がぎっしりつまっているが，それは総て世界中の天気図で，日本のも勿論列んでいる．誰かが机の前に来れば先づ「何日何時何処で空模様はどうだったか」と訊ねられる．私が日本から始めて Tempelhof 飛行場に着いた時にも，迎えに来られた先生の挨拶は「アリューシャンではどうだったか，北極の空は薄明だったか，北海は凍っていたか，マルメ海峡では揺れたか」等々だった．私を迎えに行く前にコースの天気図をずっと覚えて行ったのだと後で聞いた．研究所内には放射能，産業気象，地球物理，高層観測等いろいろな部門があるわけだが，それらを尋ねて数時間も議論をやり，私もそれに摑まったこともある．一々細かく指導されている．先生の部屋に入る前には総務課のP女史のお許しが必要なのだが，それが実は容易でないので不平を云う人が多かった．或時先生からいろいろと日本の気象の事を尋ねられたので，「僕なんか一度だってP女史のお許しにあづかりませんよ」とにくまれ口を云ったら，先生は「本当に申訳ない」「君の先生は私なんだから，誰に遠慮することもなく，あっちの小さい扉から何時でも構わず入って来い．事務と学問とは全く別の事柄だからね」と云われた．或日私は学生が特に多く集まる日に雪の講義をやらされた．私は「日本の気候」を用いていた．後で先生は私の仕事机の傍に腰掛けて，「どうも君の話によると太平洋岸に雪が多いこともあり，私にはそこがよく判らな

---

* A Profil of Prof. Scherhag in Berlin

** S. Ooi 気象研究所

—1969年4月2日受理—

いからも一度教えてくれないか」と云われる．私は「それは先生が北陸地方の地図を日本全体の地図と思い違いされているからそうなるだけの話ですよ」と答えると，先生は吃驚して，「それなら僕は全く多くの誤解に満ちて君の講義を聴いていたということだ，生徒にも誤解を生むといけないから，あの講義は全部始めからやり直してくれ」と云われた．これは子供の様に学問に謙虚な態度だと受取れる．懇親会等でもどんな下の人とでも必ず一語を交すのが研究所運営の一つの要点だと云われた．

大学教授としての先生を考えて見ると偉大さは先生の口癖の「たった二冊の」あの「天気解析と天気予報」「気候学入門」の二つの著作にあると思われる．この本に見られる normal compensation chart からの偏差が突然昇温が観測されればすぐそれと気付く下地を作っていたわけであるが，当時日本では700mb 天気図すらなく，3,000米推算等圧線等を描いていた時代に，シックネスの等しい，1,000，500，225，125，96，41mb 天気図を論じているのだから，全く驚くべきことである．然し更に大事なことは，この本がドイツの気象学の標準化，統一化に果たした役割である．ユーゴーや東ドイツでも人々がこの本に基づいて話していたことからもそれは判る．予報官になる資格試験，教壇に立つ資格試験，進学資格試験等の場合，ハンブルグの人も，フランクフルトの人も先生の口頭試問を受けたと云っていた．先生は口頭試問に重点を置き，筆記試験は殆どやらない．本当に判っていることを試すには口頭試問でなくてはだめだという．私の知った人でこの種の試験に落ちた人が幾らもあるが，先生はその落第坊主とも翌日自宅に招いたり，パーティー等で少しの距てもなく愉快に談笑して居る．こう居う点もフランクでいいと思った．

ある大雪の晩，ダンスパーティーでもう3時半頃になり，皆そろそろ居睡りを始めた，そう云う時に先生と奥さんは私を摑まえて次の様な話をされた，「ヒットラーは天気予報も戦争のためのみの様に云っていた．然し私はその頃から，世界の平和を考えてあの本を書いていた．地上ではドイツ軍とソ連軍が激戦を交えていたが，地下の私にはそんなことはどうでもよかった．夜になって戦闘が下火になると家内は平気で瓦礫の間を縫って原稿を印刷屋に運んだ．歩哨も是にはあっけにとられて通してくれた．」「私はたった二冊だ．早く管理業務から解放されて，もう二冊を残したい．」「君も今に日本について書けばきっと楽しいに違いないよ．」

主任研究官としての先生の偉さは，折に触れて小論文に速報される点にあると思う．研究所では毎日誰がか予報会報の後で30分講演をし，それを Berliner Wetterkarte というものに其の日のうちに印刷してしまう．それらを一月づつ製本にしたものがあの黄色い Abhandlungen という雑誌の一部となる．次に先生の書かれた最近のものを見れば大体の調子が判るだろう．

12月30日「今年のクリスマスは気象学者に多くの贈物をしてくれたので，その印刷を冬休中延ばす訳には行かない．それでは私は肉筆のまま印刷せざるを得なくなった．20日に私はテレビでクリスマスには雪はないだろうと云った．事実所によっては雨だったし，私の気象台の予報も当っているのだが，それにも拘らず（新聞では）私の予報が外れたと非難している．予報に対する要求がそれだけ厳しくなったのだろうか，技術の進歩はそれに叶っているだろうか．私は31年前にクリスマスの前日に予報を外したが，それだけの事から時の政府は休日も日曜も休みなく飛行機観測をやり，上層天気図を描くようにしてくれたものだった．今回は高低気圧のコースも18日以来ずっと普通で，23日迄はアメリカ，スウェーデン，ドイツの数値予報もよく当っていた．23日に急に場が変ったので是は未だ予報出来ていない．注意したいのはベルリンの500mb の気温が第二位の低極を示したこと，シベリヤの気圧が第一位の高極を示したこと，その少し南に300mb，100mb の強い低気圧が見られること等である．又雪を降らせた，南下した冷たい上層の渦が，更に冷たい高気圧に囲まれていることで，是は Flohn が20年前に一度示しただけの珍しい場合である．—中略— 中国での核実験の気圧波が5時間22分後にハンブルグを通り，それは0.05mb 以下の振巾の7ケの波から成っていた．—下略」

1月2日「前に書いたシベリア高気圧は31日21時にアガタで1093.8mb という史上最高極を示した．この日の気圧偏差の緯度平均を採って見ると，90°N—40°N が全て＋で，40°N—20°S が全て－であるから，大量の空気が北に集ったことになる．D夫人のような傑れた人でも低緯度の等圧線を5mb も間違えたのは多分このためであろうが至急直して頂きたい—下略」

1月8日私は6日の夜半に家内に叩き起され，見ると Tempelhof 一帯に大雪が降っている．然し役所に電話をかけて見ると，「当番者は雪なんか降ってませんよ」との返事だ．結局こちらでは5cm 積った．先に書いた異常な高気圧が西に進んで来たのだ．—中略—ベルリンでは＋3.8°/100m と云う逆転層があるのに，60km 南の

Lindenberg では逆転層はない．これは都会の熱によって起る降雪だと考えて私は Stadtschnee と命名する．誰か是を卒業論文に採り上げて貰いたい．—下略」

1月30日「W.B. は気象学に関係ある事は何でも発表する義務を持つ．27日に学生がまいたビラもその一つであると考えるので，私の29日に採った処置と併記してここに印刷する．—下略」

2月6日「気象学科学生代表により3月に公開を要求された確認書を以下に印刷し，後世の批判に委せたい．—下略」

2月19日「学生との第二確認書を私は喜んでここに印刷する．—下略」

これらを見ればどんな小さな事でもそれを直ちに書き残し，印刷に残しておき，又そこから研究の種を蒔こうと云う努力が見られる．先生は更にそれを新聞にも署名入りで噛み砕いて書かれる．

Morgenpost 2月18日「昨年の5月以来大循環の模様は大きく変り，極では気圧が昇り，低緯度では下った．このためドイツでは東風が多くなり，夏はよい天気に恵まれた．然し冬にはソビエトでは歴史以来の寒さになった．今度の35cm の大雪は14日，16日共に地中海に発生した二つの低気圧が相次いでやって来たためである．吾々は日の出時に南の地平線に絹雲を認め9時に大雪警報を出した．雪は9時に降り始めた．4年前の31cm の大雪も地中海低気圧に依るものであった．最深は1940年2月16日の44cm で90年平均では2月15日が最も深い，—下略」

この様に先生は毎週の様に珠玉の短篇を出されるが，この他に毎月中篇とも云うべき，地上から10mb 迄の北半球月平均図の解説を書かれる．図を自分で引き乍ら気付いた点をメモしてまとめる．然も是はタイプで縦横の比率を考えて，文章が長くても短かくても丁度A4版一頁に収まる様に印刷する．長ければ文字の大きさは小さくなるが文章を削る様なことはしない．「私は是から立体気候学を作ろうと思っている．」「こんな事を始めた．面白いと思わないか．」等と手紙をくれたが，近頃では月平均図のみならず，四季の平均図，年の平均図迄作り始めている．

主任予報官としての先生を見るときはその勤勉さに驚かされる．月曜から金曜迄毎日講堂の壇上に坐って予報会報を司会される．全職員学生の前にスクリーンに天気図を投影しつつ討論するわけだが，映写されるものは地上から10mb 迄の各層天気図の他に，状態曲線，レーダー，数値予報，地磁気，空中電位傾度の自記紙迄も出て来る．日本の Fax 受信も出る．これが一時間も続いた後に，珠玉の短篇が30分位あって，総ては16時迄に印刷を完了するのである．私は半ば公用で会報を休んだら，何かの序でに，「あの日は居なかったね」と云われた．又居眠りをしたら，何かの序でに「私の記憶が慥かだとの前提に立てば，確かあの時君は寝ていたと思うが」等と云われる，これが所謂行届いた指導と云うものなのだろう．土日は役所としては休みになるが，天気図は先生の自宅に運ばれ，御自分で引かれる．日本でも主任予報官は三人居るのに，ここでは事実上一人のようなものだから，疲れを知らない人と云えるだろう．会報となれば如何なる事務も中止され，次長の Clauß さんが代りをやることは滅多にない．研究者といえども，毎日の天気変化から問題を掴むべきだと云うわけである．従って旅行中でも天気図だけは欠かす事がなく，カメラも常に持っている．先生の戸棚はスライドで一杯，夜の2時3時迄見せてくれる．

毎年の大きな行事としては，夏に学生を連れてノルウェー，スペイン，ユーゴー，等他国に「気象観測旅行」をされ，其の後で Sylt 島に農家を借りて40日間を過ごされる．然し是も世界で最も天気の悪いと云われている北海の島で，天気解析をするためで，却って忙がしいと云う．こうした傾向に対しては日本の漁業気象放送はピタリと合って居り，「ドイツでもやるように運動している」そうである．本文に引用した最近の論文については先生から来たものの他に Hans Große 君，田宮君から来たものを使った．猶興味ある方には下記の文献が別にある事を附け加えたい．(1969. 3. 3)

ベルリン自由大学出張報告：測候時報 第30巻第7号203頁，第31巻第6号113頁，同第7号153頁，シェルハグ先生の来日：天気，第16巻第2号65頁．

東京におけるシェルハーク教授*

和　田　英　夫**

はじめに，ベルリン自由大学のシェルハーク教授を日本へ招へいした経緯について述べておきたい．日本の気象界には，以前から教授と親しい北岡龍海博士（気象研究所長）や同教授の下で長い間成層圏天気図解析の指導をうけてきた大井正一氏（気象研究所）や菊地正武氏（気象庁予報部）をはじめ，そのほかにベルリンの研究所に立ちよって教授と知己になった多くの人々がいる．私自身も実は，1962年に欧文い報に発表した論文の中で，成層圏の突然昇温に着目した研究が認められ，全く見ず知らずの教授から親しく手紙を頂くと同時に，それ以来成層圏天気図の掲載されている Meteorologische Abhandlungen の寄贈をうけ，いろいろと御指導をうけている．しかし私が1966年の秋にベルリンの研究所を訪れた時には，あいにくと教授が旅行中で，この度が初めての対面であった．招へいの準備には，昨年秋に学会の大井理事が担当者となり，北岡博士と私が実行委員を依頼され，本年3月中旬を目途に進められた．ところが招へい近かくなってベルリン自由大学でも学生騒動が大きくなり，その鋒先が研究所長としての教授の運営方針に向けられ，果して3月に予定通り来日できるか憂慮され，最終的な決定を電報で確認したような状態であった．

シェルハーク教授の日本滞在は，3月13日夕方の羽田着にはじまり，3月22日帰国までの10日間で，この間に3ヶ所で講演された．気象庁では3月15日に“天気現象への成層圏の役割”（天気掲載），大阪管区気象台では3月18日に“大気大循環と気候変動”，気象大学校では3月20日に“50年間にわたる気象学者としての体験”という演題であった．後者の2題の概要は，教授がベルリンへ帰るとすぐ“Beilage zur Berliner Wetterkarte”として発表した“日本への招へい”という教授の日本滞在記の訳文と共に，別にまとめて何らかの形で紹介したいと考えている．

羽田でお迎えした教授は，全く典型的なドイツ人といった感じの巨体の持主で，何となく日本の古武士的な匂いがするというのが第一印象であった．この古武士的という印象は，その後随行していろいろお話を伺ううちに，風格だけでなく，精神的な面でもドイツ人の伝統的なものを持っていることがわかった．かつてベルリンの研究所を訪れた時，弟子であるラビツケ博士が“うちのボスは観測，予報の仕事にきびしく，恐いくらいだ”とこぼしていたのを思い出し，なるほどと合点がいった次第である．日本でいうと，故岡田武松先生と何となく共通した風格があるように思われる．とにかく気象についての熱心さは驚くほどで，羽田からホテルに入るまで，丁度前日東京を襲った大雪の話，さらに東京へ着くまでの航空路の気象状況の話に終始し，東京の夜景なんか目もくれないという有様であった．東京滞在中は，毎日大井さんが漁業気象通報を受信して描いた天気図を提供して日本の天気状況を説明し，同行の私は専ら東京の空模様の解説役をつとめた．さらに驚いたことには，ホテルにはベルリンで発行している北半球の地上から成層圏までの天気図が，毎日航空便で2日遅れで送付されて来ており，ベルリンの天気についても毎日注意を払っていた．3月19日に北岡博士と共に奈良を訪問された時は合憎と雨であった．ところが東京が晴天であったので，教授の帰京した翌日に，私がついうっかり奈良も天気が良かったでしょうと言ったところ，とたんに反撃され，奈良における気象状況を細々と説明をうけた．しかし教授にとっては，奈良で一日中雨が降っていて，新幹線で3時間後に着いた東京が快晴という天気状況は，とてもドイツでは考えられない様子で，本当に日本のお天気予報は難かしいと何度も繰返し言っておられた．こういったall weather ともいうべき教授のお伴も，日が進むにつれて大部要領がよくなり，3月21日の買物の日には天気図をよく調べて，寒冷前線の通過を予想してひそかに折りたたみの傘を持参し俄雨に対処したりした．ところがお天気熱心の流石の教授も遂に兜を脱ぐことが起こった．というのは，東京滞在中は毎日私がホテルまで出迎えに行ったのであるが，ある朝のこと，タクシーへ乗るやイキナリ“いや昨夜は全く驚いたよ，和田博士”と早

* A Profile of Prof. Scherhag in Tokyo

** H. Wada 気象庁予報部

—1969年5月22日受理—

口に話しかけてきた．何事かとお伺いすると“昨夜11時過ぎに大井さんが，気象状況が大きく変ったと言ってわざわざ電話をかけてよこした．大井さんの気象への情熱にはとてもかなわない”と目を大きくして告白されたことである．実はこの話には裏があり，大井さんがベルリンの研究所滞在中は，教授から毎日天気，天気で鍛えられたのでその返礼？　も含めての大井さんの意識的な行為なのである．それにしても余程驚いたと見えて，教授の“日本への招へい”の文中でもこのことを天下に告白している．

都内も数ヶ所見学に行ったが，何と言っても東京の空気の汚れと交通の渋滞にはびっくりし，気象庁から柏の気象大学校まで自動車で2時間かかったのにはあきれ果てた風で，帰途には疲れも重なったと見えて居眠りしておられた．その反面，日本における時間の正確さにはかなり強い印象を受けたようで，やはり“日本への招へい”の文中で滞在中のスケジュールが非常に綿密で正確なことや新幹線が秒の単位で時間通り東京へ着いたことを特に述べている．見物した個所の中では，泉岳寺が余程気に入った様子で，大井さんのドイツ語の説明で日本の武士道にも関心を示したらしく，話がさらに日本やベルリンの学生騒動に飛躍し，今の若い人の精神面に大部不満を洩らしていた．そのうっ憤のとばっちりで“お前は武士道精神をどう思うか”とやられたりした．

気象大学校の講演では，気象学者として教授の半世紀にわたる話であったが，気象学がそのまま教授の人生という感動すべき内容であった．特に気象観測に，重点的に基礎をおき，“Berliner Wetterkarte”として毎日発行される天気図類の中には，ベルリンにおける毎日の全ゾンデ資料はもちろんのこと20種類におよぶ気象要素の資料が印刷されている．人によっては，こんな詳細な資料を刊行して果して使う人があるか疑問に思うかも知れないが，教授は観測結果の公開の原則を貫ぬき，一人でも毎日の天気現象に関心を持ち，研究心に芽ばえる人を養う考えのようである．その図の中に，世界各地の毎日最高，最低気温，降水量の表があり，最近は日本の10地点についても記載されているが，これは日本滞在中に適当な地点を私達に聞いて選んだものである．ちょっと変っているのは，ソ連，英国，アメリカ，ドイツ，スイスの毎日の予想天気図がならべて掲載されていることで，この図を見るとまさに各国予想天気図コンクールの感がある．教授は私にこの予想天気図を示し，数値予報の結果であるが，各国の予想図がみな異なると言われた．私にとっては，何となく数値予報に対する信頼というよりも，抵抗的なもの，逆に天気予報には多くの観測から解析に至る基本的な研究がまだまだ必要であることを強調しているように受けとられた．このような気象観測に基礎をおいた教授の考え方が，かつての成層圏における突然昇温発見の精神的基盤になっていることは疑いもあるまい．とにかく地上から成層圏にわたる10層の北半球天気図，さらにベルリンを中心とした局地天気図，気象観測資料が，その翌日には Berliner Wetterkarte”の名で見事な印刷物として全世界に配布されている．これはまさに驚異に値する仕事で，現在の日本の組織では到底考えも及ばぬことであろう．これもシェルハーク教授の気象学に対する情熱と信念に基づく仕事であることが，教授と身近かに接して初めて理解されたことである．

帰国する3月22日に，成層圏，長期予報グループの人達と会合をもったが，日本で成層圏資料を多くの研究に活用しているのを知って満足された様子であった．特に Abhundlungen の原図から読みとった北半球の6層に及ぶ印刷物（長期予報テクニカール・ノート No. 6）を見て，これはベルリンで私がやりたいと思っていたものだと言っておられた．

関西旅行を除くと，わづか5日間の東京滞在であったが，講演のほか気象研究所，気象庁，気象大学校，東京大学の視察とかなり強行な日程であった．東京大学視察の時は，丁度学生騒動の現場とカチ合ったが，そのすさまじさに驚くと共に，はるかベルリン大学のことを思い感無量であったに違いない．3月23日夜21時10分発のルフトハンザ機の出発が約1時間遅れたが，ゲートに消えて行く教授の姿は，心なしか学生騒動中に，研究所を10日間も留守にした責任から帰心矢の如しといった風に見うけられた．

これまでラビツケ博士の再度の来日で，いろんな面でベルリン大学との交流が深まり過去の成層圏資料も好意的に恵与して頂いている．さらに今回のシェルハーク教授の来日で，多くの講演を直接お伺いすると共に，ベルリンの研究所と一層の親交を得たことは，日本の気象学会にとっても，また気象庁にとっても極めて有意義な招へいであったと思われる．

きちんと帽子をかぶった教授，巨体を折りまげるようにして自動車に乗る教授の姿が今なおまなうらにあり，私自身の生涯にとっても最も感激すべきシェルハーク教授の来日であった．

シェルハーク教授関西方面同行記*

北　岡　龍　海**

3月16日（日）シェルハーク教授と共に，新幹線で先づ熱海に向う．熱海駅プラットフォームで法政大吉野教授夫妻の出迎えを受け，吉野氏の車でそのまま箱根に向う．吉野夫人は教授と共に独逸に2年近く生活された事があるとかで，独逸語もよく話され，大変好都合である．見晴台迄ドライブしたが，合憎の雨天で何の眺望もなく残念．

その晩吉野氏の御親戚の家で御厄介になり，シェルハーク教授と共に夜遅く迄歓談，シェルハーク教授と枕を並べて就寝．脚首の上まである長いワイシャツ様の寝巻き姿を始めて見る．

3月17日（月）9時過ぎ，吉野氏をまじえた3人で再び「こだま」の乗客となり京都に向う．途中富士山を始め沿線の風物風景に就いて説明したが，興味は専ら，雲の観察から来る天気の推移と，天気気候の欧州との差違にかえる．

京都駅で京大山元龍三郎教授の出迎えを受け，ひとまづ宿舎岡崎ホテルに向う．昼食後，金閣寺を案内してから，山元教授の配慮で予め入園許可を得ていた，修学院離宮に行く．時々「ここには Dr. Labitzke は来たか」と質問される．帰国後の話のことを気にしているようだ．園内には，シェルハーク以外は日本人1人の許可しか得られてなく，約40人ばかりの入園許可者と共に，宮内省のお役人による日本語の説明を聞く．説明が小さい声で長々と続くので途中でこれを通訳することもはばかられ，説明を終ってからでは要点しか訳せず，案内としては不充分だが仕方がない．手に入れたパンフレットを見て了解して貰うことにする．

同離宮は上，中，下の3段になっているが，上離宮には，可成広い池もあり，上からの眺めも最もよく立派なものである．中離宮から案内人と話をしながら上離宮迄上って見ると，後からすぐ続いて来る筈のシェルハーク先生が見えず，行列の最後に一番遅れて漸く上って来られる．「どうしたか」と尋ねると「面白い雲が出ていたので写真をとったりしていた」といわれたのには驚きもし又感心もした．心からの気象屋さんだとしみじみ感ずる．

その後京大構内をタクシーで通り抜けて京都地方気象台に行く．日本の地方気象台の一つの例として見せる．合憎台長は所用で出張中であったが，職員の案内で構内を隅々まで見学．先生には最も興味あるものの一つと見受けた．幸か不幸か京都地方気象台は新しく建てかえられたばかりで「日本の気象台は皆こんな近代施設か」との尋問に「そうではない，最近たてかえたばかりだ」．古い気象台が見たいという気持には答えられなかった．台長室で日本最古の天気図を御覧に入れる．「クニッピングの画いたものだ」には興味を示したようであった．

その夜，山元教授のはからいで祇園コーナーにおける日本の茶の湯，活花，狂言，文楽などの古来芸術の短編のショーを御案内する．これには大変喜ばれたが，「どれが最も印象的であったか」との尋問には「茶の湯」の返事がかえった．

3月18日（火）午前，桂離宮の見学をする．これにはシェルハーク先生1人しか許可されず，案内は英語で行われるとの事で，安心して案内をお任せして，吉野氏と2人でその間こけ寺を見る．その後山元氏をまじえた4人，阪急電車で大阪に向う．テレビで知った日本の交通事情とは違った楽な電車行で「ラッシュ以外にはこういう電車もございます」の説明で了承される．

大阪管区気象台では青木台長以下幹部の人等の案内で予報，調査，観測，測器，通信等の現場を見学した後，日本気象学会関西支部主催の講演会で，成層圏突然昇温，大気大循環の気候学的側面などを新田尚君の名通訳付きで話をされる．統計的，解析的研究手法で先づ事実の発見と問題のにつめをされる昔ながらの気象学者の研究態度の重要さを一般に印象づけたものと思う．反面，最近の数値予報技術を主とした理論的研究の導入に就いて遅れはないかと余計な心配をする．

その夜，堀奈良地方気象台長と3人で（吉野氏は所用で大阪より帰京），自動車で奈良に向い，奈良ホテルで

---

* A Trip to Kansai with Prof. Scherhag

** 気象研究所

—1969年4月2日受理—

1泊.

3月19日（水）堀台長の案内で奈良見物，先づ若草山の鹿から春日神社，東大寺，正倉院（堀台長のはからいで特に入構して外部からその特異な建造物を見せて貰う），を経て，奈良地方気象台を見学して昼食．気象台では奈良地方の特殊な地勢と，降水の分布の説明．観測施設等に大変興味を示した．昼食後，唐招提寺，薬師寺を廻り，日本の仏像芸術の一端にふれ，青木台長の紹介状により，薬師寺住職橋本凝胤にお目にかかる．僅か10分間の会見であったが，日本の偉大な僧侶の1人に会えた事を「これが偉大な宗教家に会えた2回目である」といって，大変喜ばれる．

奈良から，近鉄奈良線特急で京都に向う．私鉄特急のロマンスカーでの「おしぼり」の接待と，車内の乗り心持良さに満足される．京都から新幹線超特急「ひかり」で帰京．列車内のビッフェで簡単な夕食と思ったが，時間が時間だけに，何度のぞいて見ても一杯の客で，仕方なく夕食をあきらめ東京着．

この旅行中話の中から印象に残った話題は次の二つ．

1．日本のコーヒーと食事のうまいという話．食事度に云われるので，お世辞だけではなさそうである．

2．独逸の大学教授の停年は68才で，一般の役人は63才．教授は停年後も在職中と同一の俸給が支給されるので，68才まではやめたくてもやめさせて呉れないとこぼしておられた．成程人力の不足が進むとこうなるかと，今更ながら国情の差，文化の進展の差を感ずる．

第15期第8回常任理事会議事録

日　時　昭和44年4月28日　15.00～18.00

場　所　気象庁予報部会議室

出席者　大田，竹内，朝倉，有住，岸保，大井，神山，小平，松本，各常任理事．

列席者　須田理事．

報　告

庶　務　4月18日，日本学術会議会長に，当学会では政府関係方面へ，「気象業務および研究の整備拡充に関する要望書」を提出したので学術会議でもよろしく配意してほしいと依頼した．

集　誌　二重投稿の件については，アメリカ気象学会から措置状況を通知してくれることになっているがまだ連絡がない，しかしこのままにしておくわけにもいかないので集誌にこのようなことがあったことを載せたい，また天気にも載せたい．

学術会議　4月23日～25日第52回総会のあらましの説明があった．

議　題

議決事項

1. 総会の準備について
   (1) 43年度事業経過報告
   (2) 44年度事業計画
   (3) 43年度決算書
   (4) 44年度予算案

以上につき一部修正して承認された．

2. 天気の広告取材費について
   広告料収入の20%とすることに承認された．
3. 天気投稿規定の改定について
   承認された．
4. 外国文献集編集委員会について
   委員会を設けることとする．
   承認事項神子省吾外21名の入会を承認する．